2023年3月5日　　朝礼拝順序（午前10時半）　　(№10)

司式　杉山昌樹牧師

前　　奏　　奏楽　杉山友実子姉

開会招詞　　ペテロの手紙I2章3－4節

＊賛　美　歌　　13:1（ソングシート）

1. 万のもの　永遠にしらす　御父よ、いま恵みを　下し給え、　御名をほむる我らに。アーメン

＊開会祈祷

罪の告白　祈祷書2　罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。　　主イエス・キリストの御名によって。アーメン。　(詩編51)

罪の赦しの宣言

十　　戒　　祈祷書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。　(出エジプト20、申命記5)

＊賛　美　歌　　13：2（ソングシート）

2. 人となりし　救いの御子、主イエスよ、利き剣の　御言葉もて示し給え　まことを。　アーメン

公同の祈祷　7　キリストの二性一人格

三位一体の第二位格である神の御子は、まことの永遠の神であり、み父と同質・同等でありながら、時満ちて、人間の性質を、それに属するすべての固有の性質や共通の弱さと共にとられ、しかも罪はなかった。彼は、聖霊の力により、処女マリアの胎に彼女の本質をとって身ごもられた。

そこで、二つの十全で区別された性質、すなわち、神性と人性とが、変換・合成・混合することなく、一つの人格の中に、分離できないように結合されている。この人格は、まことの神またまことの人であり、しかも一人のキリスト、神と人との間の唯一の仲保者である。

(ウエストミンスター信仰告白8章2節によるカルケドン信条：451年)

献　　金　　（黒）教会活動（赤）全国学生会　　70

今献ぐるそなえものを　主よ　清めて受けたまえ　アーメン

聖　書　朗　読　　出エジプト34章4－10節（旧約聖書151頁）

マタイ17 章1－8節（新約聖書32頁）

説　教・祈　祷　「驚きの展開」杉山昌樹牧師

＊ 賛　美　歌　４０:１－２

1. み栄えは主にあれ、めぐみの御神は　死の陰に坐したる　み民をかえりみ、

み救いをもたらし　みとのをきよむる　かがやける使者を　つかわしたまえり。

2. み栄えは主にあれ、つみびとをゆるす　限りなきめぐみは　あらたにしめされ、

律法より解かれし　自由のよろこび、主に頼るこころに　ふたたびあふれぬ。アーメン

＊ 主　の　祈　り　　祈祷書1

天にまします我らの父よ

願わくは御名をあがめさせたまえ

御国を来たらせたまえ　御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ

我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ

国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり　　アーメン。

＊ 頌　　栄　　６５

父、み子、みたまの おおみかみに、ときわにたえせず みさかえあれ。アーメン

＊ 祝　　祷

後　　奏　　(黙祷)

報　　告 司雨宮信長老・受付古澤純一長老（次週：古澤兵庫・雨宮信長老）

本日　受付　１階：藤井牧子・佐藤紀子執事　２階：森永美保執事 ／ZOOMホスト・録音：大日南信也
次週　受付　１階：加藤良明・那珂信之執事　２階：星野房子執事 ／ZOOMホスト・録音：門脇光生

マタイ17：1－9　「驚きの展開」
六日の後
　今日の聖書は最初に「六日の後」とあります。何に対して六日なのかと言いますと、一つの前の、信仰告白の所からです。「私を何者だというのか」と問われたペテロが、「あなたはメシア、生ける神の子です」と見事にこたえました。ところが、その後で、イエス様がエルサレムで苦しめられ、殺されると語られたことに対して、ペテロはそれをとんでもない、と引き留めてしまう、ということがありました。そのようなことがあってから六日の後が今日の個所です。そして、一つ前の重要なテーマ、すなわちイエス様の進んでいかれる方向、それは言うまでもなく十字架と復活を指しているのですが、そのことは今日の所とも深くかかわっています。さらに言いますと、ペテロたちは、このイエス様の歩まれるその道筋をことごとく見ていくように招かれていると言えるのです。そしてそれは私たちも同じです。私たちもまた、ペテロの目を通して、イエス様の歩まれるところをたどるようにと招かれています。

三人であること－ゲツセマネ
　そのような目撃者の役割ということでは、ここで選ばれております三人が、実はゲツセマネでもイエス様と祈りを共にしているのは印象深いものです。ご存じの通り、最後の晩餐の後、イエス様は、弟子たちと一緒にゲツセマネというところにいき、弟子たちを座らせて、少し離れて祈られたのでした。その際、ペテロとゼベダイの二人の息子だけは、ご自身のそばで目を覚まして共に祈るようにと言われました。そこでイエス様が祈られたのは、神様の御心について最後の確認をする言葉でした。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」（26：39）。ここでも問題になっているのは神様の御心です。先週、マタイによる福音書の4章を読みまして、悪魔による三つの誘惑をイエス様が退けられた箇所を読みました。イエス様はそこにおいて常に、神様の御心を第一として、自分のために何かをすることを斥けていました。地上でのお働きを始めるその時に、まずこの事、み心に従うことが、確認されました。同じようにゲツセマネでも、イエス様は、ご自身の受ける苦しみが、本当にみ心であるのか、あえて確かめて祈っておられるのです。そして、その所で、証人となるのもまた、今日の個所と同じ、ペテロとヤコブとヨハネでした。そうしますと、この三人は、弟子たちの中でも特に、この山の上の出来事と、イエス様の十字架直前の祈りという一つ一つの出来事を見るように招かれているのです。それで私たちもまた、このところから十字架に至る道筋を見てみたいのです。

変貌とエリヤとモーセ

それでまずは2、3節の内容です。ここでは二つのことが起きています。一つは、イエス様の姿が変わって、顔が光り輝き、服がまぶしい光のように白くなる、ということで、これは、例えば復活の時に現れた天使の姿がやはりまぶしい白さとして描かれていますので、天的な光を意味しています。それから、旧約聖書において、天にあげられたと言われている、モーセとエリヤとが姿を現し、イエス様と語り合っています。これもまた、天にあげられた人が現れたのですから、この山の上に、神様の領域、天的な領域が一時的に降りて来ていたことを意味しています。とても不思議な体験ですが、三人の弟子たちは、自分たちの目の前で、このような驚くべき変化があったこと、その様子をじっと見ていたのです。それは、2節の「目の前で」という言葉や、3節の「見ると」という言葉によって強調されています。実際の所、それがどのようなものか今となっては、はっきりとわからないのですが、少なくとも、それは、夢や幻といったものではなく、弟子たちそれぞれが、現実的な出来事としてこれを経験したということです。

弟子たちの恐れ

そして、ペテロはこの出来事に大きな価値を感じたようです。それは4節の「すばらしいことです」という言葉によく表れています。この言葉にはある軽さがあるかもしれません。けれども、これに続きます二つの節を見ますと、神様が望んでおられるのは、この天的出来事をただ喜ぶことではありません。なぜなら、4節において、ペテロが口をはさんでイエス様に言ったこと、即ち、イエス様と、モーセとエリヤのために仮小屋を建てようという提案が立ち消えになっているからです。その５節ではまず「光り輝く雲が彼らを覆った」という様子が描かれています。この雲もまた、神様がそこにおられるしるしです。出エジプト記でも律法授与の時山は雲に包まれていました（出19：9、34：5）。雲がイエス様とモーセとエリヤを覆い隠した、あるいは雲の中から声がした、というのは、まさに神様がそこに臨在されていたしるしです。しかし、弟子たちはこのような神様の臨在に耐えられません。6節では「弟子たちはこれを聞いてひれ伏し、非常に恐れた」とあります。どうにもならない恐れに取りつかれたのです。それは、圧倒的な存在を前にしたときに感じる恐れです。そしてまた、すべてのことを明らかにしてしまう神様の前に立てない、という現実を突きつけられている恐れです。これは想像するしかないのですけれども、私たちがもし神さまの前に立ったら、私たちがしてきたこと、いいことも、悪いことも、一切が知られるはずです。すべてが見抜かれてしまうのです。それはとても恐ろしい体験ではないでしょうか。

山の下で－見届ける義務

ところで少し話がずれますが、今日は実は8節までで終わるつもりでした。けれどもさきほど9節までで区切りとしました。それは、ただ気が変わったわけではありません。むしろ、そこで示されている動きが大切だと思わされたためです。それはもっとも単純なことです。イエス様と弟子たちは、山の上に昇りましたが、この9節では、山から降っています。そして、この運動自体が実は大切なことです。山の上の出来事は、いわば非日常です。神様の世界に足を踏みいれるような体験です。しかし、山から下りていくことによって、イエス様も弟子たちも、日常の世界に戻っていきます。それは、いわば私たちのこの世界に戻ってくるということです。そのように下っていく中でイエス様が言われていることが実は重要です。それは「死と復活」です。イエス様は、なお、地上において、死と復活に向かって歩んでいかれる、ということがはっきりと言われています。「人の子が死者の中から復活するま

で」というところです。そして、まさに、復活を見とどけるまで、弟子たちは、この山の上で見たことを語らないように、とくぎを刺されています。それは全体を見ろ、という意味だと思われます。日常の、何気ない場所で、イエス様がされたことの全体を見て、それから、初めてわかってくることがあるというのです。そのようにして、全体から大切なものをつかみ取るようにというのです。

ペテロたちがするべきこと

　それで話を戻しますが神様は、このところで二つのことを言われます。一つは、イエス様がどのような方であるのかです。5節に「これは私の愛する子、私の心に適うもの、これに聞け」とあります。この「これは私の愛する子、私の心に適うもの」という言葉は、イエス様の洗礼の折に神様が語られた言葉でした。イエス様こそは、神様の心に適うもの、即ち神様のみ心のままに生きる方でした。そのようにして、神様の御心を地上で着々と実現していくのがイエス様であることはすでに確認した通りです。そのイエス様の歩んでいく先に待っているのは、ゲツセマネであり十字架であることも最初にお話ししました。そこでこそ、神様の御心は、完全に成し遂げられます。それは、わたしたちの罪が贖われて、わたしたちがもう一度イエス様を通して、神様の前に立つことのできるものとなるためです。この十字架の出来事全体、それを見ることが私たちに求められています。そのうえで、ここではもう一つのことが命じられています。それは「これに聞け」という命令です。いつでもイエス様の言葉を聞くように、というのです。そして、この命令は今も全く変わっていません。いや、むしろ私たちは、いよいよ、この言葉の通りに、聖書に示されている、イエス様の言葉にしっかりと聞いていくようにと促されているのです。

近付き立たせるイエス

　そして、このところでイエス様が語ってくださる言葉は明確です。そのような言葉を告げているのが次の7節です。ここではイエス様は、まず弟子たちに近付いてこられます。さらに、弟子たちに手を置いています。ひどい恐れに取りつかれてしまった弟子たちに近付き、手を置く、このことをまずしてくださっています。そして、これは、一つのカタチを示しているように見えます。イエス様がして下さることのカタチです。イエス様のあり方です。イエス様は、私たちがさまざまな状況にある時に、とりわけ厳しい状況にある時に、私たちに近付いて、そして手を置いてくださるのです。そして、ただ手を置いてくださるだけではなく、立ち上がらせてくださるのです。恐怖に打ちのめされて、地面に顔を向けてしまっているものに、手を貸して、もう一度上を向けるようにしてくださるのです。このように、私たち一人一人に寄り添って、立ち上がらせてくださる方として、このところのイエス様は描き出されています。イエス様は言われます。「起きなさい、恐れることはない」。わたしたちがどのような人生を今まで歩んできたとしても、また、今どのような人生を歩んでいるとしても、私たちに向かって、イエス様は語り掛けられます「起きなさい、恐れることはない」。

言葉の重み

　当然、この言葉には特別の重みがあります。なぜなら、先ほどもお話ししましたように、この言葉の背後には、イエス様ご自身の十字架への歩みがあるからです。イエス様は9節で「人の子が死者の中から復活するまで」と言われました。それまで、今見たことを誰にも話すな、と言われました。それは、復活に至る全体を見よ、ということだろうと先ほどお話ししました。そのようなイエス様の歩み、ゲツセマネで、大いに嘆きながら「御心のまま

に」と祈られた祈りがあり、そして、十字架の上で、神様から完全に見放されるという、神の子としてこれ以上はないという苦しみの体験をそのままに受け入れる、という従順の極みがありました。そして、そのようなイエス様を神様が、復活させられ、ご自身のもとへと引き上げられる、ということがありました。イエス様が語ってくださる「起きなさい、恐れることはない」との短い言葉の背後に、このイエス様の服従の歩み、神様の御心を実現したあゆみがあります。

驚きの展開

　私たちはなお、イエス様の受難を覚える季節の中にいます。これからも、イエス様の言葉をたどっていきます。そのような一つ一つの言葉にもまた、イエス様が私たちのために、何を成し遂げて下さったのかが、明らかに記されています。私たちは、この十字架において勝利されるというイエス様の驚くべき展開を、しっかりと見据えて、そして、イエス様によって建て上げられていきたいのです。

祈り

　父なる神さま、あなたの大いなるみ名を賛美いたします。あなたは、決して一人ではあなたの前に立てない、罪あるわたしたちを憐れみ、ただみ心に従って、御子を遣わし私たちのための犠牲としてくださいました。この事の故に私たちは、あなたの前で顔をあげることのできるものとなっておりますから感謝します。わたしたちがすでに救いの喜びに与っておりますことをいよいよ確信し、喜びの内に生きられますようお導き下さい。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。